

---

**どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。**

ぱぴろん

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。

### 【Zマーク】

Z6507Y

### 【作者名】

ぱぴろん

### 【あらすじ】

おいおいこれはどうこいつだ。

俺は三十歳まで、妖精さんを貫いて、その誕生日に大魔法である、ある程度記憶を保持したままにできるという転生魔法を使ったのは覚えてている。そのとき、すこしいじって、女子になるように設定しあわよくば、体育の時間に、合法的に更衣室でニヤニヤするという計画だったのだ。

なぜにスライム……？

が。

モバゲーにも投稿中です。初心者ですがよろしくお願いします。

俺は現代日本で魔法使いであり、魔法使いだつた。

前者は、日本で唯一の魔法を使えるところが世家の唯一の子供といつこと。片や後者は、ね……。

そして、もつとも魔力が高まるといつ三十歳の誕生日に、俺は大魔法を使つた。

それは、転生。

いままで、我が家最強の魔法使いと言われた開祖しか使え無かつたという魔法だ。

この魔法の利点は、記憶を持ったまま転生できること。

そこで俺は考えた。

なら、女の子に転生すれば、合法的に堂々と覗きが出来る、と。例えば、体育の授業に着替える時。ボディタッチと称した……（ここで一度意識が途絶えた。清廉なる妖精にはきつすぎたのだ）。嬉々として呪文を唱え、ついに幸せの一歩を踏み出した……

のは、間違いで、踏み出した所は落とし穴だった。

流れる川に自分を映してみた。緑の体表からマグマのような泡がポツポツとわき、その上に乗つたのは、やたら大きな一つ田と鱈子唇というレベルを通り越した大きさを持った口。

どうみてもスライムです本当にありがとうございました。

指定に『人間』を入れるべきだつた。もう遅いけど。だが、せめて一言言わせて欲しい。

どうしてこんなグロいの？ と。

国民的に有名な、肉まんにもなつた青いスライムならまだしも。

あれば、女の子に、「きやーかわいー」で、胸に抱かれてぐふふが出来るのに、コレじゃあ別の「キャー」になるんだけど。

しかも、転生というのは、その世界に、実際にいる生物しか出来ないので。つまり、ここは、異世界ということになる。

よし、一言言わせて。

……帰りたい。

突然、ガサガザ、と、葉がこすれ合つ音がした。  
なんだろうか。

好奇心が疼く。何か危ない生物かもしれまないが、俺は緑色で周囲は草ボーボーの上に木々がある。景色と一体化しているので大丈夫だろう。

ぬるぬるとナメクジのように這つて進む。ちなみに、俺の嫌いな生物ランキングではぶつちぎりの一位だつたナメクジだが、たつたさつき一位に転落した。見やすい位置に移動すると、二人の人間がいた。

やつたぜ人間だ！ と挨拶しようと思つたが、悲しいかなこの軀はスライムで出来ている。血潮はネバネバ、心は中学生。幾任もの合コンは（お呼びがかからないから）不敗。ただ一度の経験もなく、ただ一度の友達もなし などと忘れられた過去を思い出していると、彼らがなにをしているのか解つた。

お盛んなこつて……。

全裸の男女がいた。ここ危ないですよと注意しようと思つたが、如何せんスライムだ。つまり、俺には注意することが出来ないため、ここで、彼らが危なくないよう指を加えて（比喩的表現である。指というより腕がない）見張つておくところが筋だらう。なんて優しいんだ俺は。

なぜか血涙が流れた。

おそらく、一生でもう一度と無いである「**」」の機会。 一つ目ではあるが目を皿のようにして凝視しておこう。**

ふむふむと、人間の時なら出来たであろう考える人のポーズを想像していながら見ていると、なんだか恥ずかしくなってきた。所詮、中身は妖精にすぎないのだ。一つ目で鱈子唇のゼリー状の物体が頬を染めているという、明らかにファンタジーでなくホラー・オカルトジャンルに行かないといけないという状態になっているのは描写するのを避けておく。俺は零の実況動画をみたあと、トイレに行けなかつたのだ。

鼻血の代わりに緑の液体を垂れ流しているのは流石にきつい。とことで、鼻血の時の対処法としては、上を向くことだと聞いたことがある。だから、スライムにも適用させてみる。

熱線が通り抜けた。

何を言つているのか分からぬと思つ。俺もだ。  
順を追つて説明する。

俺が上を向こうとして、皿を推移させている途中で、ビームが飛びだして、立っていた男の頭上を通過した。

原因の考察に入る。

おそらく、皿を皿にした所為だらう。  
……皿ビーム（仮）と名付けよう。これなんて、終末兵器スライム？

しかしこれはまずい。俺は人殺しをしかけてしまった訳だ。俺の無罪を主張しておかないと、見つかってしまった時に怒られる率があがってしまう。加えて俺は肩がぶつかっただけで土下座できる礼儀正しい人間（だった）。

俺は謝罪を口にするため茂みから田一一杯ジャンプした。  
さて。

皆さんおわかりだとは思うが、ここは異世界。よくある異世界言語補正によつて、話が出来ると俺は踏んでいた。  
それがこの結果である。

「……コポオ！」

これが神の悪戯か。

異世界スライム言語補正がかかつていた。

だらだらと冷や汗を搔く俺。取りあえずお茶目にウインクして誤魔化すしかない。何せこの躯は後は、表現する方法が「コポオ」しか無いのだ。

パチリ。

なぜかオカマキャラでよくある筋肉質のオッサンのウインクが俺の脳裏をよぎつた。

二人は完全に石化しているようだ。

そりやあそ удар. 何せ、いきなりビームが駆け抜け、そのビームは当たつた木々を円形に抉るほどの威力があるのだ。そして、明らかに「みちゃだめ！」な見た目をしたスライム。極め付きには二人とも生まれたままの姿。ある意味俺に対してはもの凄い精神ダメージあるのは余談だ。

すると、止まっていた男が苦悶の表情を浮かべつつ、下に置いてあつた西洋剣を構えた。ちなみに女性は緊張しているのか一步も動かない。スライムに情事を見られたことに対する羞恥心だろうか？別に俺は人間でもあるまいに、見られても特に気にしないと思うのだが。大穴で一つ目フェチ？ まあ、俺にとつて役得の一言に

「…………っう！ はあ、はあ……なんつう強力な魔眼だ……超人級はあるか……？ 赤い目ということは吸血種の魔眼……俺は耐魔の眼鏡をつけているのに効果があるなんて……」

何かよくわからないことをブツブツと言つてゐるので、返事がてら、「コボカ」と返してやるつか? いや待てよ……。

「コボボ」しか言えないってことは、相手に何を言つても分からないということだ。つまり、俺が何を言つてもアイツの怒りを買つことはない。

なにか、溜まっていた感情が吐き出されて、すゞすつきりした。今ならタグに、キレイなスライムとつけられるくらいに俺は爽快感を覚えている。

男は「うと、剣を下におき両腕を天に掲げ、両足をがに股にして踊り狂つていだしていだしていた。

コイツ……頭可笑しい。

女も啞然としているようで、先程の四つん這いからピクリとも動いていない。

「こんなシテー川な光景たか  
う、と。」  
俺は一言言いたい  
しかし加洞朋を着

誰が好き好んで腐れイケメン電波眼鏡の裸タンスを見ないといけないのかと。葉っぱで隠すのなら許してやろう。

そして、確かに俺は女性の裸を見て興奮をする。しかしだ。俺はそれ以上に服を着た女性が好きなのだ。せめて隠すところは隠せつ

！ ちょっと目を瞑つてやるから！ あ、胸は両腕をクロスさせる隠し方でお願いします。

つまり、何かよくわからんが、今は逃げるチャンスということだ。ということで、スライムは逃げ出した！

うまく逃げ切れた！

多分上から見たら、ゴキブリのようにみえたことだひつ。

一息つく。

一心不乱に逃げ続けたので、知らぬ間に森から抜け、草の無い砂漠に立っていた。

そう言えば、俺の食料はなんだろう。未だおなかが減っていないのは幸いだが、これからもそうとは限らない。

まあその時はその時で、惹かれた食べ物を食べばいいだろう。二人人間がいたということは、人里がある森に近いのかと思ったが、うつむ、背後に見える森以外はすべて砂か青い雲一つ無い空。ふむ。

森に行けば、一人の変態。砂漠は未知。

なら俺は前に、未知に向かって突き進むのだ！

ということでゆっくりと前に進む。ちゃんとした魔法が使えばいいのだが、この体に手はないため陣は書けないし、詠唱も然り。脈々と受け継がれてきた我が家の固有魔法は体が違う以上無理。もうそれは失われた魔法。先日の俺の転生で。と同時に地球に魔法使ひはいなくなつた。俺は一人っ子で、両親はすでに他界している。ちなみにかなりの殺戮が可能な魔法ではあつた。

まあ、終わつたことはさておいて。

ただいま俺は、絶賛絡まれ中だつた。

「ジン見てこのグロいの。相當に凶悪な加護がつけられてるよ」

「そいつを俺の近くに持つてくるな。まつたく……お前も靴が汚れるぞ」

「ジンはいい主夫になれるよ。そろそろ誰かと結婚したら？」

「俺の年齢と釣り合つほどの女はそうはないだろ」「だらうね。アンデッドか不死鳥か。うわあ……」

「お前もな。ムニコ」

完全に俺が蚊帳の外で、二人は会話している。

ジンと呼ばれた方は、銀髪を顎ほどまで垂らし、俺と同じ灼眼。身長も百八十よりうえだろう。顔も整っているから、白いカッターシャツ、黒いズボンが似合っている。

ムニコと呼ばれた少女は一言で言うなら女神だ。今、その美しい足に穿いたスニーカーで踏まれているのだが、これはたまらん。いきなり、ジンという男の背から降りた彼女に見ほれていた間にはすでに俺は足の下だった。

彼女は俺にとつての理想の体現な氣がする。

墨色の腰まである髪はロープにしまわれ、血のよつた色をした瞳は吸い込まれそうなほど魔性がある。

今踏まれている所為でロープの中を垣間見ることが出来るのだが、胸の膨らみがない。まあ、身長が低いからそんなものだらうが、願わくばそのままでいてほしい。

いつそスライムになつたものこの時の為ではないかとさえ思つ。今ぐりぐりとされているのだが、一言で言つのなら幸せである。

「でね、このスライムさあ、知つてる加護というか、協賛?」

「つまり上位世界 神々の巣窟の知り合いと造つたのか?」

「当たり。加護の名前は『ぼくがかんがえたさいきょうのもんすた

ー』」

「……どんな力があるんだ?」

「あんまし覚えてないんだけど、確か、目に力を集めるとふれた物を分解するビームができる『ぴついろびーむ』に、ウインクされた、視界内にいる相手は石化される『オカ魔眼』ならおぼえてるんだけど……。あ、後、呪を唱えるとその対象が踊り出す『愚者の舞踏会』

かな

「相変わらず、アホしかいないな。上は」

「個人的には真ん中が一番怖いけどね」

「中位世界 お前曰わく忠義の樂園だつけか

女神様は目のハイライトを消した。そんなお姿も素敵！

「あそこはね、上位世界の住人が無条件で神々しく見えるらしいんだ。だから、ましな人でも『自分をぶつけてください』で、玄人になると速攻で失禁する」

「それは……気の毒だな……」

俺は完全な放置プレイをされているが、それはそれで幸せだ。

「それにしても、このスライム結構凄い偶然が重なってる。転生魔法の跡があるんだ」

「へえ……ってことは意志があるのか」

「うん。試しに話しかけてみればいいよ」

「いや、俺はこういうドロドロしたのは苦手なんだ。しかも、なんかお前に踏まれて幸せそうなのが気持ち悪い」

「……ん？ ああ、たぶんこのスライムが“×××”の加護を受けた使徒だからかな。彼は僕の非公式ファンクラブの一員で、その彼の趣味がコレに流れてるんだよ」

「お前が上にいたくない理由が分かつたよ……」

はあ……いい匂い……。

「俺、吐き気がしてきた……」

「……だね。邪魔だからどつかに蹴飛ばしておひつ。倒すにも、使徒は強いから面倒だし」

すると、俺は妙な浮遊感を感じたあと、気がつくと空を飛んでいた。

羽根が生えた訳ではない。おそらくムニコ様のお足によつて俺は光榮なことにも蹴り上げられたのだ。ちなみにパンツの色は黒かつた。

数秒程たつと重力に負け、俺は落下していた。涙が出そうな程恐いが、ムニコ様のお陰と考えるとなぜかにやけてしまう。むにゅり、とまるでウォーターベッドの上に落ちたみたいな感覚があつた。何かの上に落ちたおかげで、どうやら、助かつたらしい。何の上に落ちたのか確認してみる。

同族だった。

とかく大きい。俺のサイズがバスケットボールくらいなのだが、そいつは、俺が三十人くらいの大きさだ。まさにキングスライム。すると、俺とキングの一つ目がぶつかった。そして俺は思った。

あら、いい男、と。

……あれ？ 何を言つているんだ俺は。

自分の思考を書き消すために、飛び上がり、下に体をぶつける。だが、下は柔らかいキングと……柔らかい……胸板……。

おおおお ？ は？

「大丈夫かね？」

「……は、はい」

「ふむ、それは良かつた」

あらやだ、タイプ……渋い声、好きなの……。

どうしたんだ俺は……？ キングをみる度に体が熱くなる。これは

恋する乙女？

いや待てえええい！

俺、男、人間（だつた）！

「ふむ。本当に大丈夫かね？」

「あ……ははははい。大丈夫です……」

節目がちになる俺。キングと目を合わせると胸が高鳴る。なんで、私、きちんと喋られないの……。

思わず肩を……。

キングの頭から飛び降り、地面に体当たりする。あつぶねえ……意識をもつてかれかけた……。一人称まで変わりかけてたぜ……。

だが、何故だ？ コイツは あ、好きな眼の形。口も柔らかそう……。

落ち着け俺。コイツと目をあわせてはだめ。見ては駄目だ。見ては駄目だ。見ていた駄目だ。見ては駄目だ。見ていた駄目だ。突然、閃いた。

俺は、転生魔法をどう設定した？

『女』だ。

いらねえええええええええええええ！ え、スライムつて分裂で増やすだけじゃないの！？ 無性じゃないの！？

つまり、俺はこの、ダンディーな渋くて目の形がよくて、口が柔らかそうで、絶対に性格もよくて、一生を添い遂げたい彼に発情し

ている  
俺は、どこに落丁してしまったのか  
？

さてさて。

主人公でありながら、スライムルートという、新ジャンルを不本意にも歩もうとしている俺だが、当初の目的を忘れていた。俺は、スライムもおーけーで 人間（女）もおーけーな、スライムということだ。

そして、この作品についているガールズラブはスライムと 人間（女）の組み合わせという意味になる。ということはだ。作者がこれをつけたということは、未来的にはキャッキャウフフな展開もあり得るわけで、もし今、シブイおっさんスライムルートに入ってしまえば、果ての無い混沌を生み出すということになってしまつ。つまり何がいいたいのかと言つと、このフラグを叩き潰すしかない。

だが、俺を助けてくれたこの恩 スライム 人の心を傷つけないようにしなければならない。このスライムに非はまつたく無い。尊敬するくらいいいやつだ。

幸い、大概のこういう「落 下 系 ヒ ロ イン」（俺）などの「不良や追っ手などの危険から助けられた」系のヒロインは基本的にメインヒロインにはなれないのだ。ちなみにそれは、やたらと主人公に対して優しくて通い妻のように朝ごはんを作りに来るお隣の幼馴染がメインヒロインになることと同様の確率である。そしてかなりの高確率で中盤あたりでヤンデレと化したり、もしくは死んでしまい主人公の成長の糧となつたりする。最悪の場合だと、メインヒロインなのに人気投票で、自分のサーブアントに負けちゃつたりすることもある。ちなみに俺はヤンデレより彼女が一番好きだ。黒くなつたときの。

また、ライトなノベルで、タイトルに自分の名前がついた落 下 系のメインヒロインがいたとする。しかし、彼女は一巻はともかくと

して、一巻、二巻……と積み重ねていくうちに段々と 空氣になってしまい、結局三巻あたりで、ビリビリした二万人くらいいる妹や、特にその姉にメインを奪われ、ただのハラペコシスターとなつてしまつたりする。

前述した通りのパターンで行くと、つまり俺は結局メインヒロイ  
ンになつたりすることはないので、<sup>主人公に、</sup>メインヒロインよ  
り主人公に対する惚れ率が少ない。メインヒロインの王道であるツ  
ンデレなんて、俺のもつとも嫌うジャンルだから、自分がそんな態  
度をとるなんてこともあり得ない。

この考察を元に結論を下すと、普通に友達と接するようにキングと  
接するのがフラグを折るための最高の選択肢、ということだ。

「ありがとうございました……けほつ」

「……」は存在を消すために、おしとやかで、かつ、存在が消えてな  
くなりそうなほど消えてしまいそうな小さな声で、女性としての本  
能がでないようにするため、ウインクをするかのように目を伏せる。  
ツンデレの要素など無く、これならただのモブスライムGくらいの  
存在として認識されることだろう。

ちら、と目を開け、キングを見てみる。

……顔を真っ赤にして、固まっていた……。

俺は重大なことを忘れていた。大概の男はツンデレ萌えなどとふ  
ざけたことを抜かす野郎が多いが、それより一つ強いジャンルがあ  
る。

それは、病弱系ヒロイン。

制限としては、ハーレムでなく、主人公と一対一の場合で無いと  
いけないのだが、見る限り、周囲にヒロインは居ない。そして、そ  
の病弱系ヒロインは基本的にどんな性格をしていても赦され、美化  
される。得にツンデレが付随したときは最強だ。ちなみに俺は不覚  
にもツンデレもいいなと思ったことがあった。半分の月を見た時に

俺が泣きそうになつてしまふのもその所為だ。俺は聞いた話だが、ある男の友人がそれにあり得ないほどにはまり、それをやけに推してくるので逆に、「他人に薦められると読みたくないくなつてくる」というとても面倒な性格の男は、最初は、いや、よまねーし、だつたら桃太郎読むし、と言つていたのだが、あまりにもしつこいため、ついに「仕方ねーな」と折れ、不覚にも読んでしまい、見事にはまつてしまつたということを聞いたことがある。そしてこうも言つていた。「実写なんてなかつた」と。

話を戻すと、先ほど俺は口の中へと侵入していた砂の所為で咽てしまい、キングを上目遣いで見てしまった。

だから主人公によくある、「美少女の上目遣いを見て、無意味に顔を赤くし動きを止める」という病氣をキングは患つてしまつたのだろう。

結果的にだ。俺はスライムルートに入りそうになつていた。  
しかし、俺はここで重大なことに気がついた。

俺が主人公、ということだ。

何が違うの? と聞かれれば答えたくないが答えなければならぬいだろ?。

そう、俺はヒロインでなく主人公で、女主人公だ。  
これはかなり結果の変動に影響を及ぼす。

主人公のメインヒロインは基本的にソンデレという理論がある  
ように、女主人公にもそれはあるのだ。

そうそれは、鉄火面系どSイケメンだ。

どういう感じなのか説明すると、基本的に逆ハーレム系は、まず、女主人公は平凡な容姿をしているか、もしくは「実は誰にも知られないが、顔を隠している髪を切るとまあ不思議」系美少女、さらには「自分の容姿に気がついていない性格の良い鈍感な完璧系」美少女に分かれる。

その前提条件はスライムの美的基準なのでどうか解らないため、上のどれかに該当する、と仮定する。

する」とだ。

逆ハーレムの面子は、メインになる可能性が高いのは、先に書いた鉄火面で実はどうで主人公が可愛くて、主人公だけをいじめるクール系。ちなみに高確率で言うセリフは「いけない子だ……」のような痛い（甘い）セリフ。過去編に入ると、特にファンタジーなどではこういう系統が王様だった場合、「やたらと毒殺されかけるで、その黒幕は側室の傲慢な息子」の場合が多い。俺様口調を持つこともある。

次に、身長が小さく、ショタっぽい王子様系。こういうタイプはやたらと女装したりもする。腹黒というのも結構な確率で付随される。基本的に過去編、特にファンタジーでは「側室の王子だが、本妻の息子より優秀」とかいう設定が入ることが多い。

そしてこれが最後なのだが、このキングにあてはまるであろう、「父性系ダンディーイケメン」が入ってくる。しかしこういうタイプは、主人公を影から支えるタイプで、メインになつたりはしないことが特徴だ。ちなみに例外として、風早くんのようテライケメンだと、心が綺麗過ぎるので、逆ハーレムなどにはなつたりしない。ということで、俺はドS系にさえあわなければ、望んでも居ない逆ハーレムということにはならないのだ。

「なんだ、そいつ……俺様の庭に入りやがって」  
「ねえねえ、僕の花壇を踏むとか何様？」

そして、フラグ（二重の意味で）が建つことがあるので気をつけよ、というのが本日の教訓である。

## 002（後書き）

注意。四人ともグロ系スライムで、人間が聞くと「コボオ」しか言つていません。

俺は見事に逆ハーレムフラグを着々と不本意ながら建設しているわけだが、それ以上に死亡フラグが色濃い。

二人の緑色の体表を持った、グロ系スライムに殺意を向けられているのだ。

その理由は、何者かによつて、唯一のまともそうなスライムであるキングが石化されてしまったから。その冤罪を俺はこのアホ共にかけられているというわけだ。おそらく、機関のえーじぇんとにによる陰謀に違いない。エル、プサイコンガリ。

どうでもいいが、男スライムは女スライムより体が大きいっぽい。こいつらも、キングと同じくらいの大きさだ。

確かにこの場にいたスライムは俺だけだ。しかし、こんなか弱い（？）スライムがそんなこと出来るわけがねーだろ。お前らの目は節穴か！

なんだかむかついて來た。ここは言ひ返してやろう。俺も（元は）男だ！ 散り際くらい、根性を見せてやるのだ。幸い、キングのように眞のイケメンではないからだろうか、胸がドキ！ などといふことは無いから囁むことはないのだ。

「おい！ いきなり、人に殺意をぶつけるとか、にやにすんにやこりやー！」

そう、俺は「ミユ障。

今までのことを思い返してほしい。今まで一度でも目を見て話そうとしたことがあつたか。それは否。

最初の「コポオ！」も実は「」めにやせい！ 」だったように、俺は長年人と話をしなかつたため、トークスキルが皆無なのだ。ちなみに、最後に話したのは、なんちゃって美人の栗色の髪をしたコンビニ員に、「あ、チャック全開ですよ」と言われたときだ。

俺はもう殺されるだろう。あんな強大なスライムずに襲われたら、

俺などすぐにペシャんこだ。

まじ、いまにも顔を真っ赤に……。

「……フン

俺は馬鹿の中の馬鹿だ。002話で何を語った? ここはどう系鉄火面のイケメン。

そう、これは見事に王道に入り込んでしまったようだ。解らない人のために解説すると。

どら系は基本的に王様が多く、王様の妃を選ぶため、後宮などで女の醜い争いが勃発したりして、「もう、女なんて信じられない」とかぬかしおり、イケメンなのに本妻がいなかつたりする。

そしてここに現れるのは女主人公(俺)。

自分は王様なのに、面と向かって話せるやつがいるのか? フン、面白い。こいつを後宮に入れてみよう。とかいう本当に迷惑極まりないことを考えているに違いない。

そして、お前をいじめるの楽しい、みたいなふざけたこと語つのだ、おそらく耳元で。

しかも、この思考さえフラグなのだ。

一般的にどら系の王道としては、「女主人公は最初どらが嫌いだが、だんだんと田でおつてしまつようになる……」みたいな流れになつてしまつ。そう、まさに俺の思考がその初期段階と言つてもいいだろ。これがショタインズゲートの選択!

このまま流されてしまえば、俺はメインヒロインになつてしまつ。だが、俺には必殺の一つ手がある。

覚えているだろうか。そう、田田びーむ(仮)だ。しかし、同属を殺すなんてことは俺には忍びない。

ということで、俺にダメージがあるが、とりあえずやるだけやってみる。それをやつて駄目だったら、また逃げ出すしかない。

「ふもふもふもふもふも。俺はちきゅーじんのへいたいきょうは

「ひねもんたんへいじんのひめりである。わざりのたひめおひだいでは、わがまひとくとまつなるせいか」

そう、俺は電波系ステイムになりきる。

電波ちゃんが『S LINE』のロインとなるなんて俺は聞いたこと  
がない。これこそ逆転の一歩！ くくくははははははははははははは！

「にいさん、こいつ頭おかしいよ！」

「いや、なかなかに調教しがいがあるじゃねえか」

一なんだと「

やつか。どんなに抗つても、惨劇は変えられない。  
運命を立ててしまつたら、もう変えられないというのね。そして、ショタくん。  
本当にありがとうございました。君がこの小説唯一の常識人だよ！

と思つてした時期が俺にもありました

そう、シミタの口から飛び出た一丁の銃が、どSの眼球をぶち抜いた。

何か怖いって、口から左脇から吐いて出しているのだ。俺はホラーが無理だとあれほど言つたのに！

スたんの所へ行くお！

「ふう、危なかつたですね」

ひええええええええええええええええ！

手くいったか。あと、私はこうこう者だ」

ショタスライムから生まれた、金髪で百五十センチくらいの左サ  
イドテールちゃんは名刺を取り出し、俺の口の中へと放り込んだ。  
途端、彼女の情報が浮かんできた。

×××の加護【聖女】ソフィア。  
そして、俺は果てしなくどうでもいいことを思った。  
ヒロイン、襲来？

### 003（後書き）

やつぱり大事ですよね、ヒロイン！  
だが、主人公はスライム。  
そう人生はうまくありません。

聖女によると、この世界というか、下位世界と呼ばれる選ばれた物体は、上位、中位世界に存在する神などによつてあたえられた【加護】という物を与えられる。ちなみに、俺のいた世界やこの世界は下位世界と呼ばれるらしい。

スライムは【加護】があるらしい。

【加護】によつてもたらされた力の一つだそうだ。ちなみになぜ聖女 ソフィアがスライムのヌイグルミを着ていたかというと、加護を与えた存在が、「そいやー、友神と一緒についた最強のスライムがあるんだけどさ。搜ってきてよ」というわけで、加護を与えた存在は【使徒】というのだが、そいつは与えた存在に絶対遵守らしく、俺を捜しに来たらしい。

「 そういうことは加護のある存在である俺が、上の人には絶対遵守しないといけないので、かなり鬱だ。俺は縛られても嬉しくないのだ。」  
縄で縛るんならまだしも。

そんなことを考へてゐるとソフィアがいきなり、独り喋りだした。

言葉を失う、といつのはこのことか。水着を着た金髪美少女が羞恥に悶えている。透き通った目はトロンとしており艶かしい。そして羽織つていたパーカーを脱ぐと、彼女はなぜか水着になつた。眼

福眼福

「……つと。おおおおー！これが、アイシラの作ったスライムか。完成度たっけえｗｗｗにしても、うわっ、グロつｗｗｗｗｗお？俺の要望した『チンカラホイ』もきちんと実装されてるじゃんｗｗｗマジ、乙ｗｗｗ流石ムニコの『オカ魔眼』テラチートｗｗｗｗｗううわ、中一病の『愚者の舞踏会』地味だなあｗｗｗｗあはっはははー！」

なぜか解らんが、このソフィアの中に居る何かは、俺とひどく性質が似ている気がしてならない。

スタイルの良い水着のソフィアもどきが大爆笑している。スライムの顔を見て笑うとか呪つてやる！

「ん、お？　おお？　お前俺に呪いをかけようと、マジ乙ですｗｗｗｗｗあれ、こいつ女じょんｗｗｗｗクッソワロチｗｗｗｗｗ」

なんだろう。これが同族嫌悪というヤツだらうか。ネット上で、自分がこんな感じで書き込みをしてたなんて、恥ずかしさを通り過ぎて怒りがわいてくる。草うぜええええ！

「はー、腹が痛い……」

「ンダテメエ。誰だコラア」

俺は確かにスラスラと会話が出来ない。だが、似たような雰囲気のやつにはくつてかかる。しかも、俺は加護とやらを持っているらしい。負ける気がしない。ガクガクブルブル。

そう。勝ち目があると、俺は強気になれるのだ。

「は？　俺に喧嘩うるとかワロツシュｗｗｗｗ身の程を知れよｗｗｗ絶対お前友達いないだろｗｗｗｗいても絶対お前のことパシリ

くらこにしか思つてねえよ~~~~~

「は？ お前こや、スライムだからって舐めてんじやねーぞ」「うう。童貞！」ときが調子乗つてんじやねえし~~~~お前こや”はがないだろ”~~~~”俺は友達がいない”の略~~~~

「.....」

「いや、なんかすまんかった.....」

「いえ、こちらこそ、あなたみたいな方に生意氣言つてすみません.....」

お互い、抉つてはいけない傷とこつのがあるのだ。こつのよつて葬式みたいな雰囲気になつてしまつから。

「.....そうだ。捗してやつがいるんだ」

「はあ.....」

「うへ、かちちやくて胸が無くて、黒髪赤目の、そのペロペロしたくなる太股をした少女なんだが.....」

「あいました。YESロリータ、YESタツチみたいな子ですよね。なんかものす”いイケメンと一緒に歩いてました、確かジンとか言う人でした」

スフィアの中に居る何かは顔を顰めた。

「あんの、クソヤロウか.....よし、ぶちこぶ あふん」

バタリ、ヒソフイアが前に倒れていた。後頭部には、スフィアの三倍ほどある岩石が当たつている。よべこれで倒れるだけですんだな。

その後ろには、パンパン、と手を叩く執事服を着た、金髪碧眼ショタが立っていた。

「 つたぐ、あんなイケメン殺しちゃつたら勿体無いし、ムーロが泣いちゃつたら困るじやないの、何してくれてるのかしらね、蛆虫」

なぜ……女言葉……？ そして、彼は俺と眼があつと、俺の存在に今気がついた、といわんばかりに首を傾げた。

「ん？ あつ！ あなたは、お？ あのでくの坊、私の『イケメンホイホイ』つけてくれてるじやない。今度お礼にハーゲンダッツの蓋を舐めさせてあげようかしら？」

ショタがやけに高圧的に女言葉で話している。シユールだ……。

「ま、いいわ。……おい、蛆虫。とつとと搜しにいくわよ  
「ん、んあ……っつ、クソ痛えな…… げ、なんでお前が居るんだよクサレビッ」

ソフィアの頭に拳骨が落ちると、そのまま彼女の頭は地面に突き刺さりクレーターを作り上げた。その余波で起こった地震の所為か、俺の体まで揺さぶられて、吐き気がする。おそらく、俺が人間だったらちびつていただろう。

そんな俺をよそに、一人は消えていった。

あれ？ 普通、異世界にきたら俺TUEEEEってなるんじやないの？ 拳が震んでたよ……ああ、日本が懐かしい……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6507y/>

---

どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。

2011年11月23日18時52分発行